令和５年度　赤穂中学校区小中連携教育　活動記録

１　令和５年度　小中連携教育研究部会具体的実践

〇小・中学校相互の授業研究を通して、子どもたちの実態の相互理解につとめる。

〇算数と数学の内容の系統性を把握し、指導の継続性を求めて、指導の改善を図ることにより、小・中学校９年間を見通した指導の相互理解につとめる。

２　赤穂中学校区の活動報告

（１）赤穂小学校

〇実施日：令和５年１１月１７日（金）

〇単　元：５年算数科「単位量あたりの大きさ」
　　６年算数科「比例と反比例」

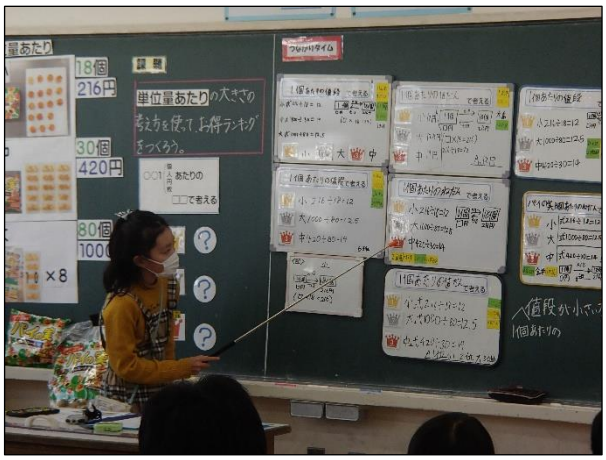
〇事後協議

・５年生ではお菓子、６年生ではペットボトルのキャップなど、身近なものを利用した学習課題で、実際に具体物が準備されており、導入がすばらしかった。児童の興味関心を一気に引きつけることができていた。

・５年生の学習課題では、ふつう大サイズの方がお得であるという予想に反して、単位量あたりの値段や個数を求めると小サイズがお得であることがわかり、算数の知識を使うことの良さを感じることができたと思う。

・赤穂小では、学習を「自分事」にするための手立てをもち授業づくりを進めている。学習に見通し自ら課題を見出せるように、問題場面の提示の仕方を工夫したり、具体物を使って実際に見たり触れたりして問題へのイメージを膨らませるようにした。

・教科書の問題を解くだけにせず、算数（数学）への興味をもてるような授業を小学校では大切にし、中学校へつないでいきたい。



（２）赤穂中学校

〇実施日：令和６年１月２４日（水）

〇単　元：１年数学科「空間図形」

〇事後協議

・見取り図、展開図は小学校での既習事項だと思うが、あまり定着していない。

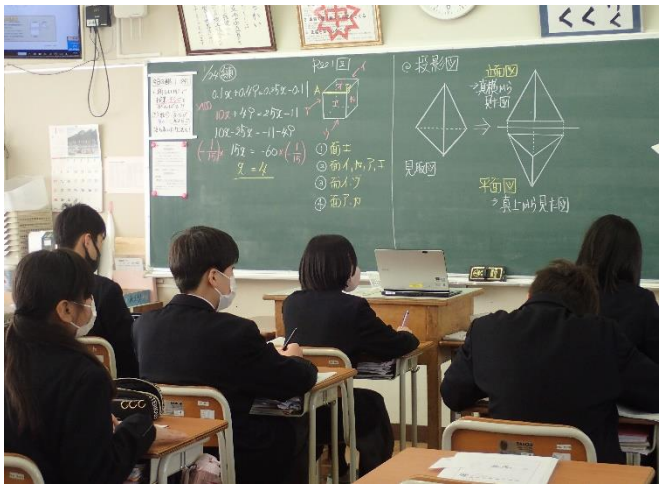
・具体物がないとイメージするのが難しい生徒が多く、考えが浮かばない。

・小学校では操作活動が多いが、中学校では、具体物がなく文章や図から想像したり、イメージして考える問題になっていくため、思考が広げられる生徒とそうでない生徒でどんどん差がついていく。この壁は大きい。

・見取り図などの図をかけない生徒が多くなっている。

・四則計算の定着が年々低下しているように思う。単純な計算は、小学校の頃からくり返しやっておいてほしい。特に、分数はしっかりやっておいてほしい。

・小学校では宿題で紙のドリルではなく、タブレットを使っている。計算の過程などをきちんと確認することができないので、本当に理解できているのかという不安がある。中学校では数学の宿題は紙でやっている。入試は紙のテストなので、書けるようにしておく必要がある。



３　まとめ

小学校の算数科では、児童が主体的に自分事として学びに関わり、算数自体の楽しさを実感して欲しいと考える。そのために、「既習の知識と結び付けて十分に問題場面や題意を把握すること」、「表現活動を活性化し交流による算数的思考力の育成」「日常生活や社会事象と算数との関わりを知ること」を目指し授業作りをしているところである。学習課題に対する動機付けを大切にしたり、友達と学び合うことでの手応え感じさせたりすることを積み重ね、「もっとやってみたい」という思いを中学校での数学科への土台とできるよう、研究を積み重ねていきたい。